

PRÍLOHY

Príloha 1: Reportáž zo stĺpiku Koe z ranného vydania dňa 25.12.1991

元従軍慰安婦・金学順さん（手紙 女たちの太平洋戦争） 【大阪】

韓国の「太平洋戦争犠牲者遺族会」の元朝鮮人従軍慰安婦、元軍人・軍属やその遺族 35人が今月6日、日本政府を相手に、戦後補償を求める裁判を東京地裁に起こした。慰安婦だった原告は3人。うち2人は匿名だが、金学順（キム・ハクスン）さん（67）＝ソウル在住＝だけは実名を出し、来日した。元慰安婦が裁判を起こしたのは初めてのことだ。裁判の準備のため、弁護団と「日本の戦後責任をハッキリさせる会」（ハッキリ会）は4度にわたり韓国を訪問した。弁護士らの元慰安婦からの聞き取り調査に同行し、金さんから詳しい話を聞いた。恨（ハン）の半生を語るその証言テープを再現する。（社会部・植村隆）

○17歳の春

「私は満州（現中国東北部）の吉林省の田舎で生まれました。父が、独立軍の仕事を手助けする民間人だったので満州にいたのです。私が生後100日位の時、父が死に、その後、母と私は平壤へ行きました。貧しくて学校は、普通学校（小学校）4年で、やめました。その後は子守をしたりして暮らしていました」

「『そこへ行けば金もうけができる』。こんな話を、地区の仕事をしている人に言われました。仕事の中身はいいませんでした。近くの友人と2人、誘いに乗りました。17歳（数え）の春（1939年）でした」

「平壤駅から軍人たちと一緒に列車に乗せられ、3日間。北京を経て、小さな集落に連れて行かれました。怖かったけれど、我慢しました。真っ暗い夜でした。私と、友人は将校のような人に、中国人が使っていた空き家の暗い部屋に閉じ込められたのです。鍵（かぎ）をかけられてしまいました。しまったと思いました」

「翌朝、馬の声に気づきました。隣には3人の朝鮮人の女性がいました。その人たちから『おまえたちは、本当にばかなことをした。こんなところに来て』と言われました。逃げなければならぬと思ったのですが、周りは軍人でいっぱいでした。友人と別にされ、将校に『言う通りにしろ』と言われました」

「将校は私を暗い部屋に連れて行って、『服を脱げ』と言いました。恐ろしくて、従うしかありませんでした。そのときのことはしゃべることさえ出来ません。夜明け前、目が覚めると将校が横で寝ていました。殺したかった。でも、出来ませんでした」

。私が連れて行かれた所は、『北支（中国北部）カッカ県テッペキチン』というところだということが後で分かりました」

○赤堀の家

「この慰安所は赤い堀の家でした。近くには民間人はいません。軍と私たちだけでした。5人の女性がおりました。22歳で最年長のシズエは将校だけを相手にしていました。サダコ、ミヤコ、それに友人のエミコ。私はアイコと呼ばれていました。近くの部隊は300人くらいでした。その部隊について、移動するのです」

「軍人たちは、サックをもってきました。朝8時を過ぎたら、やって来て、夜は将校が泊まることもありました。休む暇はありません。長い人でも30分以内でした。でないと外から声がするのです。多いときは20人以上相手することもありました。しかし、戦闘の時は、静かでした。『ダ、ダ、ダ』という銃撃の音が聞こえるときもありました。お金などはもらったことはありません」

「食べ物は軍人たちがもって来ました。米やミソ、おかずなど。台所があり、自分たちで作って食べました」

「テッペキチンには1カ月半いて、また別のところに移動しましたが、名前は覚えていません。そうこうするうちに、肺病になりました」

「ずっと逃げたいと思っていました。そんなある夜、私の部屋に、男の人が忍びこんできました。びっくりしましたが、その人は『私も朝鮮人で寝るところがなくて来た』と言いました。両替商をしているという、その人に助けてくれるように頼み、一緒に逃げました。他の人まで連れて行くような余裕はありませんでした。その年の秋のことでした」

○解放の後

「南京、蘇州などを経て、上海へ行き、その人と夫婦になりました。質屋をやり、娘と息子が生まれました。1946年の夏に、船で仁川へ戻り、ソウルの難民収容所に入りました。そこで娘が死にました。そのあと、ソウルで部屋を借り、私はノリ売りの商売を始め、夫は掃除夫になりました」

「夫は酒を飲むと、『お前が慰安所にいたのを助けてやったではないか』と言って、私を苦しめました。その夫も、朝鮮戦争の動乱の中で死に、息子を育てながら行商しながら生活していました。しかし、その息子も小学校4年の時に水死しました」

「生きていこうという気持ちもなくなりました。死ぬことしか考えませんでした。全羅道、慶尚道、済州道など全国を転々とししました。酒やたばこをやり、人生を放棄

したような生活を続けていました。10年ぐらい前に、これじゃだめだと思い始めました。ソウルに来ました。家政婦をやったお金で、小さな部屋を借りています。私の不幸は慰安所に足を踏み入れてから、始まったのです。この恨みをどこにぶつけようか。だれにも言えず苦しんでいました。今は月に米10キロと3万ウォン（約5200円）の生活保護を貰っています」

○募る怒り

「いくらお金をもらっても、捨てられてしまったこのからだ、取り返しがつきません。日本政府は歴史的な事実を認めて、謝罪すべきです。若い人がこの問題をわかるようにして欲しい。たくさんの犠牲者がでています、碑を建ててもらいたい。二度とこんなことは繰り返して欲しくない」

「日本政府がウソを言うのがゆるせない。生き証人がここで証言しているじゃないですか」



これまで韓国に戻った元慰安婦たちは、沈黙を続けていた。ところが、昨年6月、日本政府は強制連行に関する国会で「従軍慰安婦は民間業者が連れ歩いた」など軍や政府の関与を否定する答弁をし、その後も「資料がない」などと繰り返してきた。こうしたニュースを聞いた金学順さんは、「自分が生き証人だ」と今年夏に、はじめて名乗りでた。原告3人の外にも最近、体験を公表する女性が出て来た。

一方、ハッキリ会（03・5466・0692、東京都渋谷区渋谷2の5の9パル青山301）も慰安婦に関する情報を集めるなど調査を続けている。¹

¹ Uemura, Takaši (25.12.1991) 元従軍慰安婦・金学順さん（手紙 女たちの太平洋戦争）【大阪】. in *Asahi šinbun* [online]. dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php> (Citované 30.6.2014)

Príloha 2: Prerozprávaná sved' Kim Hak Sun

Kim Hak Sun:

Kim Hak Sun nebola ženou útechy dlho a ani jej zážitky nie sú veľmi rôznorodé. Napriek tomu si zasluhuje ospravedlnenie a kompenzáciu. Narodila sa v Mančúrii, kam jej rodičia utiekli po kórejskej vzbure v 1919. Keď jej otec umrel, jej matka sa opäť vydala a vrátili sa do Kórei. Hak Sun nevychádzala s nevlastným otcom a často utekala z domu. Keď mala štrnásť, dali ju do školy v Pchjongjangu, aby sa z nej stala kisaeng, tradičná kórejská zabávačka podobná japonskej gejši. Učila sa inštrumentálnu hudbu, spev, kaligrafiu a etiketu. Jej poplatky pokryl majster pre kisaeng, ktorý ju adoptoval spolu s ďalšími dievčatami.

Školu skončila v sedemnástich, ale keďže ešte nemohla dva roky pracovať, jej nevlastný otec ju vzal spolu s ďalším dievčaťom do Pekingu v 1939 s nádejou, že tu nájde lepšiu prácu ako doma. Boli ako mnohé iné: „remeslo nasleduje zástavu“. Svedectvá sa líšia, akým spôsobom sa dievčatá dostali pod kontrolu japonskej armády, ale ich cestu do Číny už musela schváliť armáda. V každom prípade, dievčatá boli oddelené od ich nevlastného otca a cez noc boli odvezené vojakmi nákladným autom do opusteného čínskeho domu. Tam ich vyzliekli a znásilnili. Po tomto „skrotení“ boli umiestnené spolu s tromi inými kórejskými dievčatami do opatery kórejsky hovoriacej ženy. Tá im dala japonské mená, Hak Sun sa stala Aiko. Ich pôvodná stanica útechy bola v Tiehbichene, ale ženy pravidelne nasledovali vojakov blízko frontu.

Ženy neboli platené, dostávali len minimum šiat a jedla. Hak Sun musela poskytovať nielen sexuálne služby, ale i spev a tanec, najmä pred útokmi. Rovnako ako v iných zaznamenaných prípadoch, ženy boli nútené sledovať dekapitáciu čínskych „špiónov“ – pravdepodobne aj na ich zastrašenie. Hak Sun neprepustili, ani keď ochorela na tuberkulózu. Zachránil ju napokon jeden Kórejec s loďou, ktorý obchodoval so zlatými a striebornými mincami – profitujúci biznis v čase chaosu dostupných mien. Raz sa zastavil v stanici a uniesol ju do svojej záložne vo francúzskej koncesii Šanghaja. Tam sa vzali. Ku koncu vojny mali syna a dcéru. Hak Sun spomína i na to, ako počúvala Kim Kooa, ktorý bol na čele provizórnej kórejskej vlády, a hovoril o jeho nádeji na budúcnosť pre kórejských občanov. Neskôr ho muži kórejského prezidenta Syngmana Rheea prenasledovali domov a zavraždili ho. Hak Sun bola tiež na nejaký čas uväznená spolu s ďalšími Severokórejcami.

Jej manžel živil svoju rodinu tým, že sa stal armádnym dodávateľom. Ich vzťah sa pokazil. Keď sa opil, vyčítal jej minulosť ženy útechy a pripomínal jej, že bez neho by bola dávno mŕtva. Napokon umrel po Kórejskej vojne pri stavebnej nehode. Aj jej dcéra umrela na cholery. Už sa nechcela znovu vydať, lebo sa bála ďalšieho pohrdania. Zarábala si obchodovaním v rôznych častiach krajiny. Jej posledná rodinná zodpovednosť sa vytratila, keď sa jej desaťročný syn utopil počas plaveckého nešťastia.

Hak Sun vždy tvrdila, že jej hlavný cieľ nie je finančná kompenzácia, ale odhalenie tak dlho zakrývanej pravdy. Dokonca uvažovala nad samovraždou v cisárovej prítomnosti, aby tento cieľ dosiahla. Kórejské a japonské ženské združenia jej poskytli právne rady a pripravili súdny prípad ako praktickú alternatívu.²

² Hicks, George (1994) *The Comfort Women: Japan's Brutal Regime of Enforced Prostitution in the Second World War*. New York, W.W. Norton & Company, str. 188-190 (vlastný preklad)

Príloha 3: Kató danwa (加藤談話)

朝鮮半島出身者のいわゆる従軍慰安婦問題に関する内閣官房長官発表

1992（平成4）年7月6日

内閣官房長官 加藤紘一

朝鮮半島出身のいわゆる従軍慰安婦問題については、昨年12月より関係資料が保管されている可能性のある省庁において政府が同問題に関与していたかどうかについて調査を行ってきたところであるが、今般、その調査結果がまとまったので発表することとした。調査結果について配布してあるとおりであるが、私から要点をかいつまんで申し上げると、慰安所の設置、慰安婦の募集に当たる者の取締り、慰安施設の築造・増強、慰安所の経営・監督、慰安所・慰安婦の衛生管理、慰安所関係者への身分証明書等の発給等につき、政府の関与があったことが認められたということである。調査の具体的内容については、報告書に各資料の概要をまとめてあるので、それをお読み頂きたい。なお、許しいことは後で内閣外政審議室から説明させるので、何か内容について御質問があれば、そこでお聞きいただきたい。

政府としては、国籍、出身地の如何を問わず、いわゆる従軍慰安婦として筆舌に尽くし難い辛苦をなめられた全ての方々に対し、改めて衷心よりお詫びと反省の気持ちを申し上げたい。また、このような過ちを決して繰り返してはならないという深い反省と決意の下に立って、平和国家としての立場を堅持するとともに、未来に向けて新しい日韓関係及びその他のアジア諸国、地域との関係を構築すべく努力していきたい。

この問題については、いろいろな方々のお話を聞くにつけ、誠に心の痛む思いがする。このような辛酸をなめられたの方々に対し、我々の気持ちをいかなる形で表すことができるのか、各方面の意見も聞きながら、誠意をもって検討していきたいと考えている。³

³ 日本政府およびアジア女性基金の文書. in *Asian Women's Fund* [online]. dostupné z <http://www.awf.or.jp/6/statement-01.html> (Citované 21.3.2016)

Príloha 4: Kóno danwa

河野官房長官談話（1993年8月4日）

いわゆる従軍慰安婦問題については、政府は、一昨年12月より、調査を進めて来たが、今般その結果がまとまったので発表することとした。

今次調査の結果、長期に、かつ広範な地域にわたって慰安所が設置され、数多くの慰安婦が存在したことが認められた。慰安所は、当時の軍当局の要請により設営されたものであり、慰安所の設置、管理及び慰安婦の移送については、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した。慰安婦の募集については、軍の要請を受けた業者が主としてこれに当たったが、その場合も、甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに加担したこともあったことが明らかになった。また、慰安所における生活は、強制的な状況の下での痛ましいものであった。

なお、戦地に移送された慰安婦の出身地については、日本を別とすれば、朝鮮半島が大きな比重を占めていたが、当時の朝鮮半島は我が国の統治下にあり、その募集、移送、管理等も、甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた。

いずれにしても、本件は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題である。政府は、この機会に、改めて、その出身地のいかんを問わず、いわゆる従軍慰安婦として数多（あまた）の苦痛を経験され、心身にわたり癒（いや）しがたい傷を負われたすべての方々に対し心からお詫（わ）びと反省の気持ちを申し上げます。また、そのような気持ちを我が国としてどのように表すかということについては、有識者のご意見なども徴しつつ、今後とも真剣に検討すべきものと考えている。

われわれはこのような歴史の真実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視していきたい。われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。

なお、本問題については、本邦において訴訟が提起されており、また、国際的にも関心が寄せられており、政府としても、今後とも、民間の研究を含め、十分に関心を払って参りたい。⁴

⁴ Anon. (6.8.2014) (慰安婦問題を考える：下) 日韓関係、なぜこじれたか. in *Asahi šinbun* [online]. dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php> (Citované 30.8.2014)

Príloha 5: Reakcie premiéra Abeho Šinzóa na otázku žien útechy

2007年3月5日の安倍答弁

安倍晋三「河野談話は基本的に継承していきます。狭義の意味で強制性を裏付ける証言はなかったということです。

ご本人がそういう道に進もうと思った方は恐らくおられなかったんだろうと、このように思います。また間に入って業者がですね、事実上強制をしていたという、まあ、ケースもあった、ということでございます。そういう意味に於いて、広義の解釈に於いて、ですね、強制性があったという。官憲がですね、家に押し入って、人攫いのごとくに連れていくという、まあ、そういう強制性はなかったということではないかと」

2月7日（2013年）質問者である前原誠司民主党議員に対する答弁。

安倍晋三「整理をいたしますと、まずは、先の第一次安倍内閣のときにおいて、質問主意書に対して答弁書を出しています。これは安倍内閣として閣議決定したものです。つまりそれは、強制連行を示す証拠はなかったということです。つまり、人さらいのように、人の家に入って行ってさらってきて、いわば慰安婦にしてしまったということは、それを示すものはなかったということを明らかにしたわけであります。

しかし、それまでは、そうだったと言われていたわけですよ。そうだったと言われていたものを、それを示す証拠はなかったということを、安倍内閣に於いてこれは明らかにしたんです。しかし、それはなかなか、多くの人たちはその認識を共有していませんね。

ただ、勿論、私が言おうとしていることは、20世紀というのは多くの女性が人権を侵害された時代でありました。日本に於いてもそうだったと思いますよ。二十一世紀はそういう時代にしないという決意を持って、我々は今政治の場にいるわけであります。女性の人権がしっかりと守られる世紀にしていきたい、これは不動の信念で前に進んでいきたいと思っています」――⁵

⁵ Teširogi, H. (2013) 安倍晋三の従軍慰安婦を「人攫いのように人の家に入って行って攫ってきた」の証拠はないを考える [online]. dostupné z <http://blog.goo.ne.jp/goo21ht/e/e0af9c3405b0f526a5408b3edac7493a> (Citované 8.5.2016)

Príloha 6: Príspevok čitateľa z dňa 18.6.1991 v stĺpiku Koe

余りに自虐趣味（手紙 女たちの太平洋戦争） 【大阪】

大阪市 伊藤高一 60歳

「女たちの太平洋戦争」（中国編）の編集ぶりを見て、朝日新聞はどこまで我が民族に“負の遺産”を植えつけたら気がすむのかと、読んでいて胸が悪くなる。

一般市民の多くが戦火の巻き添えをくったのは中国だろう。しかし、米軍の日本本土焦土作戦で、疎開するたびに被災した日本人はどうなるのか。ましてや広島、長崎の被爆者は殺されて当たり前ですか。

戦火に巻き込まれて泣くのはいつも“無辜（むこ）の民”であることは、何千年来の昔から決まっている。戦火を交えた双方の市民に被害が出るのは、残念ながら致しかたないことである。一方的に、日本軍のみを「悪」とする編集ぶりはおかしいのではないか。

これでは、本多勝一氏の「南京大虐殺 万人坑事件」の一方的聞き書き帳と何ら変わるところがない。また、日本軍部に責任のあった戦争ではあろうが、その軍を構成したほとんどの兵士たちは召集で駆り出されたわれわれの祖父であり父であった。

その父や兄弟がかの地でそんな悪虐を働いていたのか、とこの記事を読んで若い人にはやり切れない暗い気持ちになり、民族としての自信喪失につながりはしないか。いや、すでにその兆候はあったのではないか。湾岸戦争への対応策が分からずに右往左往するだけで、世界の失笑を買ったのはつい先ごろのことである。

思うに朝日新聞は、真実を伝える美名の下に、ひたすら日本民族の愚民化に邁進（まいしん）しておられるが、民族の誇りを持たぬ国に未来はあるのだろうか。自国の歴史に自信を持たぬ若者を育成して一体、どういう日本にしてゆかれるつもりか。真剣に伺いたい。

なお、従軍慰安婦は朝日新聞の意図とは違い、大部分は女たちが高給に釣られて応募した商売人がほとんどであった。米軍が日本占領と同時に米兵慰安のため、そういう目的でキャバレーやダンスホールを開くよう日本側に要請してきた時、昨日までモンペ姿で軍需工場で働いていた「大和なでしこ」が、大挙して応募してきた事実と同じような出来事であった。

朝日新聞にもその悲しい記事は残っているはずだ。自虐趣味の歴史掘り返しはもういい加減にしてほしい。

あなたたちは、面白半分に日本軍の暗部ばかりあばいているが、生への執着を断ち切れずに、命令であるがために中国大陸で、南方で散っていった何百万の無名戦士の死――すなわちわれわれの父や兄の心情を思いやってくれたことがあるのだろうか。

その祖先たちがあったればこそ、今日のわれわれの繁栄の時代があるのではないのか。余りにも自虐趣味の報道を見るたび、私の兄の戦死（当時の中国での長沙〈湖南省〉作戦で戦死）は何であったのか、涙の浮かぶ今日このごろである。⁶

⁶ Itó, Takaichi (18.6.1991) 余りに自虐趣味（手紙 女たちの太平洋戦争）【大阪】. in *Asahi shinbun* [online]. dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php> (Citované 30.6.2014)

Príloha 7: Reakcie čitateľov na príspevok z dňa 18.6.1991 uverejnené 24.6.1991

「自虐趣味」の投稿に思う（手紙 女たちの太平洋戦争） 【大阪】

○過ちを認識せずに過ちをわびられようか

吹田市 河村泰宏 高校生 17歳

18日付手紙欄、「余りに自虐趣味」の意見に反対である。

米軍の本土焦土作戦、2度の原爆体験、確かに日本は被害者である。従軍慰安婦や現地の兵士の心境についても、氏の意見は正論かも知れない。しかし、被害者だからといって過去の罪が許されることは決してない。

社会科の教科書が話題になる。その社会科で空襲や原爆についてはかなり詳しく習った。しかし、侵略戦争の歴史は表面的な年号しか習った覚えがない。アジアに対する侵略戦争がどのようなものなのか知らない。

日本に国際化を求める声大きい。「国際社会で大切なのは、大勢の友人を持つことだ」とは天声人語の一節だ。過去の過ちを心からわびずに真の友人が出来ようか。過ちを認識しないものが過ちをわびようか。答えはノーである。

歴史を正しい解釈と共に知る。かみしめる。そして、歴史の反省のもとに国際社会に大勢の友人を持つ日本をつくる。それが日本の若者の使命だと信じている。

だから毎朝「女たちの太平洋戦争」を読む。

○知らないふりこそ恥ですよ

京都府綴喜郡 高角やよい 大学生 20歳

私たちが知ることによって何か落ちこむとすれば、それは過去を知らずにいた自分に憤りを覚えるからです。悪い事をしたという事実は消せないのです。

被害者として、日本人は広島を、イスラエル人はナチスを、アメリカ人は真珠湾を忘れられるのでしょうか。そして、自ら償うことを知らない者が、誇りある者と言えるのでしょうか。過ちによって自信喪失することは、未来の可能性を信じようとしない愚者の行いだと思いませんか？

たかだか20年の人生で私が知ったことはわずかだ。けれど、自分たちの文化だけが優れているという思い込み、他民族への敬意を忘れ、暴虐の限りをつくす大国という存在の、地上に絶えることのなかったという事実が非常に悲しい。

権力を得た人間のだれでもが繰り返す過ち、もしかしたら自分もこうなるかも知れない。

世界中で他民族に一度も悪いことをしなかった民族があるのなら教えて下さい。その意味で日本人であることを恥じるのは、全く無知で愚かだとしか言いようがありません。しかし、自分のしたことも知らないふりをしてごまかそうなんて恥ずかしいことですよ。

最後に。私は戦後生まれですから金もなく食うに困った人間が、どんな行動に走るものなのか知る由もありません。しかし、女性の働き口がなかった時代に、それでも生きてゆかねばならなかった人たちの行為に対して、それは互いに嫌な思い出だから忘れろ、みたいなことは言わないで下さい。50年近くも忘れようとして忘れられなかったほどつらい記憶を、これからも1人で背負わせようなんて思わないで下さい。

話して下さい
 痛みをわけて下さい
 そんな風にしか生きることのできなかった
 それでも一生懸命生きてきた
 あなたの尊さを
 初めて
 私に教えて下さい
 それはどんな生き方よりも 貴重だから
 ○反省なくして友人はできぬ

西宮市 増田勝陸 会社嘱託 69歳

昭和15年(1940年)、私は陸軍省恩賞課に勤務していました。仕事は中国の前線から送られて来る兵隊の変死者、行方不明者、逃亡兵の名簿作りでした。変死者は主に自殺者、行方不明者は作戦の最中に戦場で迷い子になったらしい者、または敵に拉致されたりした者、逃亡兵は軍隊内部の私的制裁、または戦場の悲惨さにたえ切れず、部隊から抜け出た者たちのことです。

その数は十数万人であったか。いずれにせよ、その人たちは戦場の落ちこぼれとして処理されたものです。「戦場の兵隊は虫ケラのようなものか」と、当時の私は感じていました。その私が今度は本当の虫ケラとなって中国の山野を転戦、今では倒した敵兵の冥福(めいふく)を日夜祈る身です。敵兵もまた、一介の虫ケラに過ぎなかったのだと、今しみじみ思うのです。

私は敗戦時、鑑真の町、揚州(江蘇省)にいた。その関係で、戦後は揚州と日本の交流史に関心を持ち、昭和13年12月の南京攻略軍は途中の揚州にどのような攻撃をしかけたのかと、その資料をたぐっていて、香川県に在住する当時の従軍兵から南京虐殺の実態を知らされました。

真鍋達というその歌人兵士は揚州無血占領の後、戦闘詳報を南京の司令部に届けに行き「城外城内に飛散する何百何千の死体を見て、その時ばかりは歌に出来ませんでした」と述懐しています。

たとえ人間同士の殺しあいという過酷な虫ケラの運命を体験したとしても、生者は死者のために祈り、地球上から兵器製造業者をのみ潤す戦争というばかげた野蛮な行為の根を絶つ行動を志向するなら、虫ケラもまた、人間として復権することができる。自らの過失や恥辱を直視するのは勇気がいります。

日本は、それを避けることで「日本人はあいまいな民族」との印象を世界に与え、そのことで日本人は逆に引け目を感じ、ひいては祖国愛を喪失するという現象を生じさせる。

過去の戦争を好戦軍人の責任とせずに関わらずに自分を含めた日本民族の課題としてとらえ、その反省に立って戦争の根元である兵器を造らない売らない平和への道を模索していくことが、我々の子孫への遺産であり、数多くの戦争犠牲者に報いることにもなるのです。⁷

⁷ Kawamura, Jasuhiro, Takacuno, Jajoi & Masuda, Masačika (24.6.1991) 「自虐趣味」の投

Príloha 8: Reportáž zo stĺpiku Koe z ranného vydania dňa 12.9.1991

知ってほしい慰安婦（手紙 女たちの太平洋戦争・韓国） 【大阪】

「何万人もの若い朝鮮人女性が日本の手で従軍慰安婦として強制連行され、悲惨な最期を遂げました。今生きていても心身ともに破壊されています。日本は責任をとろうとはしません。経済大国になったといわれますが、本当の“大国”とはいえないのではないのでしょうか」。韓国・梨花女子大の前教授で、韓国挺身（ていしん）隊問題対策協議会共同代表の尹貞玉（ユン・ジョンオク）さん（65）はこう言って私の顔をじっと見た。日本各地で慰安婦たちの足跡を調べるため8月末に来日した尹さんに、強行日程の中、短い時間だったが、インタビューに応じてもらった。（編集委員・井上裕雅）

○日本政府は信用できない 尹貞玉前教授に聞く

日本の植民地下で少女時代を送ったため、尹さんの日本語は流暢（りゅうちょう）だ。

「アジアの平和をいうのなら、日本は歴史を整理する必要があります。加害者としての日本、つまり侵略した責任を処理しなくては」

「相手が小さいと無視しようとする。その日本の“人格”が今問われています」

「生きている元慰安婦には医療面の補償ありません。日本政府は信用できない。でも、日本政府と日本国民は違います。『アジアの平和と女性の役割』について話し合うシンポジウムが5月末から6月初めにかけて東京と神戸で開かれましたが、そのとき日本の女性たちは真剣に取り組んでいました」

インタビューした日、尹さんは姫路から大阪に着いたばかり。そしてすぐに三重県へ。日本を追及する言葉の内容とは逆に、疲れを柔らかい笑顔に包んでいた。その表情が心に残った。



尹さんは、私との会見の中で、従軍慰安婦問題について責任を認めようとしぬ日本と、日本人は別だ、といった。が、「考える集い」では、在日女性の間から「日本の民衆も謝罪を」「日本の女性は加害者の立場にいたのだ」という意見が出た。そのあたりのことについて私にも苦い経験がある。

数年前、補償からとり残された台湾人元日本兵とその遺族の戦後を、日本と台湾の

関係者を対象に取材していた時のことだ。一応、1987年に戦死者と重度障害者には1人200万円の弔慰金が支払われることになったが、取材当時はそれすらもなかった。

台湾出身の王育徳・明大教授（故人）が皮肉っぽく言った。

「あなたたちは中国孤児のことになると熱心だが、台湾人のことには冷たいんですね。信義より“血”のつながりを大切にする民族なのですか」

日本人が中国孤児について熱心だとは思えなかったが、王さんのような見方もあるのか、と思った。

私たちは朝鮮人や台湾人たちへの償いに対してあまりにも無関心ではなかったろうか。「日本政府と日本人は別」と言った尹さんも、私が日本人だからそう強調してみたのかもしれない。今、王さんの言葉がしきりに思い出される。

- 「乳張る女性も連行された」

8月24日夜、大阪・森ノ宮ピロティ小ホールで開かれた「『朝鮮人従軍慰安婦問題』を考える集い」には在日韓国・朝鮮人の女性をはじめ、男性、日本人らが参加した。その数約300人で、会場に入りきれないぐらい。従軍慰安婦問題に対する関心の高まりがみえた。

尹貞玉さんの講演をはさんで十余人の参加者が同問題などについて自分の考えを発表、最後に「8・24アピール」を採択した。

大きな拍手に迎えられて登壇した尹さんはよくとおる声で話し始めた。日本語だ。メモをとる参加者が多い。

「慰安婦たちは『モノ』扱いだっただ。天皇の『下賜品』でした。『突撃一番』というコンドームをつけない軍人もいた。梅毒にかかり精神が錯乱した女性もいた。目が見えなくなっても軍人の相手をさせられた人もあったのです」

尹さんの講演に先立って語った日本人女性は声をしぼり出すようにして話した。

「世の中で一番いとしいものは自分の乳を飲んで赤ん坊ではないでしょうか。その若いお母さんたちが、何時に広場へ集まれといわれ、赤ん坊を寝かせて集まると車に乗せられ、従軍慰安婦として連行されました。張る乳をおさえながらどんなに日本人を恨んだことでしょう。私は1944年、ソウルの朝鮮人の子供たちの学校に勤めていました。命令で子供たちも軍需工場へ、ということで毎晩のように家庭訪問しました。私は無知でした。親御さんにとって私は鬼のように思えたことでしょう」

「日本の女性は従軍慰安婦のことをほとんど知らない。慰安婦のことがちゃんとさ

れないと私は安心して死ねません」

加害者側にいた自分をさらけ出した話だった。⁸

Príloha 9: Reportáž zo stĺpiku Koe z ranného vydania dňa 8.11.1991

ある従軍慰安婦の死（手紙 女たちの太平洋戦争）

太平洋戦争中、朝鮮半島からだまされて沖縄へ連れてこられた「元従軍慰安婦」が10月、那覇市内のアパートで病死した。7日の本欄で大阪市の金伊佐子さんからの投稿にあったペエ・ポンギさん。77歳だった。19日火葬され、ノンフィクション作家の川田文子さん（48）＝東京都練馬区＝と在日同胞の人たちの5人が立ち会った。1944年、沖縄へ来てからすでに約半世紀。再び故国の姿を見ることがなかったポンギさんについて川田さんに手記（写真も）を寄せてもらった。川田さんの著書に、ポンギさんらの戦中、戦後を追った「赤瓦の家－朝鮮から来た従軍慰安婦」（筑摩書房）がある。

白い細片を拾いながら隣で金賢玉さんがいった。

「スカスカして黄色いのは具合が悪かったところなのよ」

賢玉さんは夫の金洙変さんとともに、朝鮮人同胞として、ポンギさんを自分の親同然に世話してきた方だ。見ると、蜂（はち）の巣のように穴のあいている細片がある。ポンギさんは長年、神経痛に悩まされていた。その部分だろうか、と私は思った。遺骨は豊見城の道心寺に一時納骨されることになった。

十数年前、ある新聞記事で、従軍慰安婦として朝鮮から沖縄の渡嘉敷島に連れて来られたポンギさんの存在を知った。この時、ポンギさんの半生を辿（たど）ることはそのまま、日本と朝鮮、日本と沖縄の近代史を辿ることになるろう、と直感した（渡嘉敷島は米軍が、慶良間海峡を艦船の停泊地として確保するため沖縄本島攻略に先立って猛攻した慶良間諸島の中のひとつの島で、住民は米軍上陸直後に300人余が自決に追い込まれている）。

だが、はじめてポンギさんと対座した時、そのような観念的な図式ではポンギさんの半生はどうていとらえられないことを痛感した。しかし、いまふりかえれば、やはり、ポンギさんの生涯は、日本の植民地支配のすさまじい影響を負い続けて終わった

⁸ Inoue, Hiromasa (12.9.1991) 知ってほしい慰安婦（手紙 女たちの太平洋戦争・韓国）【大阪】 in *Asahi šinbun* [online]. dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php> (Citované 30.6.2014)

。

ポンギさんが体験した植民地の貧困は私の想像を絶した。中国侵略の兵站基地（へいたんきち）として、当時、水俣に本社をおく日本窒素肥料株式会社の系列資本が開発した工業都市興南で青春時代を過ごした。

30歳で沖縄に来て沖縄戦を体験。渡嘉敷島では最も山深い234高地に、日本軍が陣地を構築して後は、炊事班の一員となり、敗戦後、米軍の石川収容所に収容された。そこを出てからは、最も激しい戦禍を受けた中部から南部にかけて、1日としてとどまることなく、さすらった。ことばは分からず、知る人も金も、住む所もなく、沖縄の人さえ食べるものに事欠く焦土で、1人で生きねばならなかった。

一緒に渡嘉敷島に行って、いつも洗濯をしたという浜近くのせせらぎをみつけた時、ポンギさんはそこに座り込んでしまった。そして、仲間とよく歌ったという歌を口ずさんだ。その歌の内容は、まめまめしく働く料理上手な娘さん、いつか、男の子も女の子も産んで、きっとよいお嫁さんになるでしょうね、といったものだった。

性を蹂躪（じゅうりん）されるということは、子を産み、家庭を築き、労働に従事するという、人としてごくあたりまえな営為を奪われることだ。少なくともポンギさんの場合はそうだった。

思えばポンギさんは、家族とともに暮らすという経験が、一家が離散した数え6歳でプツリ切れている。それは、ポンギさんが植民地支配下に生まれた悲惨だ。日本による土地収奪は貧農層を最も強く圧迫した。ポンギさんの父は耕す小作地もなく農家の作男として働いていたが、一家離散の誘因は、とりもなおさず絶望的な貧しさにあった。

私は、従軍慰安婦としての証言を得たいと思ってポンギさんに会いに行った。だが、慰安婦であった戦時の数カ月より、重い戦後を過ごして来たことをまざまざとみた。ポンギさんだけではなく、慰安婦として連行された多くの朝鮮女性が重い戦後を生きてきたに違いない。

かつて、皇軍将兵の性処理をする者として植民地の女性をあてた、それと同質の性意識が何の反省もされず、現在もなお、男女を問わず多くの人々の中に深く浸透している。性を買った側ではなく、買われた側が恥辱を拭（ぬぐ）い去れないかのような倒錯した風土の中で、慰安婦であった女性たちは半世紀近くも固く口をとぎしてきた

。

戦地で生命を落とした者も少なくないのだが、生き残った人々も、何も語れぬまま

に生涯を終えてしまう、そのようなことがあってよいのだろうか。ポンギさんは例外的に証言者として矢面にたたされたが、公には何の償いもされずに亡くなった。

従軍慰安婦問題の真相究明、および遺族や生存者に対する謝罪・補償を政府に遂行させることが私たちの責務である。そして、皇軍による慰安婦連行の事実を歴史から抹殺してはならない。

○追悼映画会に200人が集まる

「胸の内を私に話したことで恨（ハン）が半分晴れたといっていました。でもあとの半分はそのままにして死んでしまって...」。記録映画「アリランのうたーオキナワからの証言」の監督朴壽南さん＝神奈川県茅ヶ崎市＝は電話の向こうで絶句した。

ポンギさんは短いシーンだが同映画に登場している。撮影に応じたのはことし3月ごろ。その後、体調が良くなかったという。

「ポンギさんのうしろには、いまでも声をあげられない数万人の女性がいるはずですよ。彼女たちを支えるには国家による補償が必要です。ポンギさんについては大田沖縄県知事に尽力をおねがいしようと考えていたところです」

ポンギさんは目立つのはきらいだったが、映画に登場してからは表情も柔らかくなっていた。

今月4日にはポンギさんが連行された渡嘉敷島で、同映画の追悼上映会が開かれ、島内の人口の3分の1に当たる約200人が集まった。さらに近く、ポンギさんを知っている人たちの手で追悼集会などが予定されている。（編集委員・井上裕雅）⁹

⁹ Inoue, Hiromasa (8.11.1991) ある従軍慰安婦の死（手紙 女たちの太平洋戦争）. in *Asahi shinbun* [online]. dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php> (Citované 30.6.2014)

Príloha 10: Reportáž Itóa Takašiho z dňa 1.8. 1994

従軍慰安婦への補償は個人に 伊藤孝司（論壇）

戦後補償問題の解決に積極的だった社会党から首相が出て、政府の補償政策は軌道修正されないままに進もうとするのだろうか。

政府は、アジア・太平洋戦争中に旧日本軍によって性的奴隷にされた被害女性たち（いわゆる従軍慰安婦）に対する「おわびと反省の気持ち」の具体策として、青少年交流や留学生支援のための「アジア交流センター」設置などを、五年間で約一千億円の費用をかけておこなうとしている。

私は、韓国で最初に被害女性が名乗り出た一九九一年の秋以降、韓国や朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、台湾、フィリピンなどで七十人近くの被害者たちを時間をかけて取材してきた。

被害女性たちの、現在の生活・健康状態をつぶさに見てきた者として、今回の政府案には異議がある。それは、この案は被害女性たちの希望とは大きくかけ離れ、実施されても被害者の生活・健康状態はまったく改善されないからだ。

名乗り出ている被害女性たちの多くは貧困にあえいでいる。例えば、韓国では韓国政府より生活支援金として一時金五百万ウォン（約六十二万円）・毎月十五万ウォン（約一万九千円）が支給されている。医療費負担についても軽減されたが、ほとんどの人が「慰安所」でかかった性病や体を酷使したことの後遺症治療に多額の治療費を払っており、いまだに最底辺の生活から抜け出せない人たちもいる。

また、年を取って働けなくなったにもかかわらず、老後の生活の世話をしてくれる身寄りのない人たちもいる。つまり、生活は多少は向上したものの、老後の不安を持ちながら困窮生活を続けているのだ。

自国政府が支援している韓国ですらこのような状態で、他の国ではその国の政府による被害女性への特別な措置はほとんどおこなわれていない。

七十歳前後になった被害者たちが、残されたこれからの生活を穏やかに過ごすためにも、被害者個人に直接に渡るお金が必要なのだ。先日、韓国で会った十数人の被害女性のだれもが「交流センター」案に強く反対し、個人への補償を強く求めている。

政府は、今までにも「人道的措置」という名で、広島、長崎で被爆した韓国人被爆者への基金設置とサハリンに置き去りにした韓国・朝鮮人の帰国支援、台湾人元日本兵の戦死者遺族と重度戦傷者への弔慰金・見舞金支給を実施してきた。ただし、これらは被害者の要求よりもはるかに低い金額だった。

被害女性たちが受けたのは性的被害だったために、被害者でありながら隠れるように暮らしてきた。いわば、半世紀前に受けた傷をいやすどころか、今日まで引きずってきたといえよう。それにもかかわらず、今回の政府案は今までよりも大きく後退した内容になっている。

政府は、今回の事業を「補償に代わる措置」だとし、被害者個人への補償を「しないのは政府の一貫した方針」（五十嵐官房長官）と述べている。その理由は、例外を認めると歯止めがかからなくなるというのだ。確かに、アジア各国などの被害者からは政府に次々と補償が求められており、現在おこなわれている訴訟だけでも三十件に

も及ぶ。

だが、なぜこれほど多くの補償要求が出されているのかを、被害者の立場に立って考えてみる必要があるだろう。どの国の被害者たちも、日本政府からの心からの謝罪と、謝罪の具体的な形としての補償を受け、被害者としての過去を清算して死にたいと思っているのだ。

今回の「アジア交流センター」案は、何がなんでも個人への補償はしないという政府方針を守るために、被害女性たちとまったく無縁な事業に多額の費用をかけることでごまかそうとするものだ。金をかけた事業や基金をいくら積み重ねても被害者たちの理解は得られない。

戦後五十年を来年に控えた今こそ、政府の戦後補償政策を転換し、被害者個人への補償を実施する絶好の機会だろう。そのために必要ならば、台湾人元日本兵への弔慰金・見舞金支給でおこなったように立法措置をとるべきではないか。

(フォト・ジャーナリスト＝投稿、三重県)¹⁰

Príloha 11: Príspevok od čitateľky v rubrike Opinion z dňa 30.8.1994

戦争体験談を歴史教科書に（声）

つくば市 稲垣里奈（中学生 15歳）

戦争体験が十分に語り継がれないままに、まもなく戦後五十年を迎えようとしています。

受験戦争とまでいわれる私たちの生活の中では、テレビ・新聞・本などに触れる時間があまりありません。戦争を語り継ぐ活動にも、ほとんど参加できないのが現状です。戦争のことを何も知らない私たちが、このまま日本の未来を担ってもよいのでしょうか。

私たちは、過去の過ちを再び繰り返さないために歴史を学んでいます。しかし、今日、過去最大の過ちだと考えられている戦争について、教科書では全体的な流れを記述しているだけです。旧日本軍がどのようなことをしたのか、民衆が戦争をどのように感じたかは書かれていません。

最近、元従軍慰安婦らが賠償を求めて問題になっていますが、そのような問題が存在したことさえ触れられていません。戦争がどのくらい大きな過ちなのかは、教科書を読んだだけでは少しも理解できません。

義務教育としての歴史の教科書に、本当に過去の過ちを繰り返さないことを目的とした記述が少ないことに、私は疑問を持ちます。そして、そのような資料が歴史の教科書に載ることを望みます。¹¹

¹⁰ Itó, Takaši (1.8.1994) 従軍慰安婦への補償は個人に 伊藤孝司（論壇）. in *Asahi šinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 2.7.2014)

¹¹ Inagaki, Rina (30.8.1994) 戦争体験談を歴史教科書に（声）. in *Asahi šinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 2.7.2014)

Príloha 12: Úvodník z dňa 17.6.1995

償いに私たちの心を（社説）

一昨年八月、当時の河野洋平官房長官が発表した日本軍の**元従軍慰安婦**についての実態調査報告を読み直したい。

「慰安所は、軍当局の要請により設営されたものであり、設置、管理および慰安婦の移送には、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した」

「甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、官憲が直接これに加担したこともあった」

あれから間もなく二年である。慰安婦として働かされた外国女性に対する償いのための政府事業計画が、村山政権の手で、ようやくまとまった。

基金を近く発足させ、民間から募る資金をもとに、年内に元慰安婦たちに一時金を贈る。政府は、元慰安婦の生活や医療を助ける事業のために、基金を通じて資金を拠出する。また、国家としての謝罪と反省を伝えるため、首相の手紙を元慰安婦に送る、というものである。

青春をまるごと押しつぶされた悲惨な体験を半世紀もの間、引きずってきた元慰安婦たちの間からは、日本政府が国の責任を認めるといふなら、なぜ、国費による補償をしないのかという声があがっている。

もったもである。その怒りと失望から目をそむけるわけにはいかない。

しかし、それにもかかわらず、多くの心ある人々が政府の基金計画を正面から受け止め、元慰安婦たちへのせめてもの償いの気持ちを伝えるために協力することを、私たちはいま願う。

賠償問題は国家間で決着しており、国は個人への補償をしないというのが日本政府のいう大原則である。

政府拠出による元慰安婦の医療支援には、大蔵省が最後まで抵抗した。残る戦後補償は慰安婦問題だけではない。いったん原則を崩すと、支出がどこまでも広がってしまう。そんな恐れを、多くの政治家たちもまた共有している。

日本政府に国家賠償を求めた元慰安婦の訴訟の行方は厳しい。

元慰安婦は高齢化した。残された時間は少ない。国家補償を待つということだけでは、機を逸することになりかねない。

指摘したいのは、民間募金には、国家補償にはない利点もあるということだ。戦争を直視して過去の誤りを正すのは、政府や国会だけの問題ではない。

一人ひとりが募金に応じるかどうかの選択を通じて、それが自分自身の課題でもあることを考える機会となしうるのではないだろうか。

戦後処理に個人が身銭をきるのはおかしいという議論があろう。海外の戦争被害者の支援活動をする人たちの間に政府の責任のなれ、との批判があって当然だ。

しかし、戦争が残した傷痕を少しでもいやし、東アジアの国々との信頼をはぐくむのは、日本人みなの仕事である。植民地支配や戦争を、当時の政府や体制だけのせいにするわけにはいかない。

もっぱら政治家や政府に戦争の後始末をゆだねてきたことが何をもたらしたろうか。終戦五十周年の国会決議は、衆院での惨めな結末をへて、参院では今国会中の採択が見送られた。

有権者が意思表示するようにならない限り、この状況は変わるまい。

政府の計画に、韓国をはじめ関係国政府は、おおむね好意的な反応を寄せている。もし、この事業までが挫折するようなことになったら、日本は国際社会にどういう顔を向ければいいのかのだろう。¹²

¹² Anon. (17.6.1995) 償いに私たちの心を (社説) . in *Asahi šinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 2.7.2014)

**Príloha 13: Konfrontácia Itagakiho Tadašiho a Kim San Hi a správa o 明るい日本
z dňa 5.6.1996**

板垣発言に韓国の元慰安婦が抗議 板垣議員、「証拠を」と反論

未成年の女性を日本が強制的に慰安婦として働かせたことについて「歴史の真実ではない」などと発言した板垣正参院議員に四日、韓国から来日中の元慰安婦、金相喜さん（七三）が面会し、「私は十五歳で拉致、連行され、日本軍部隊の慰安婦にされた。私が生き証人だ」と抗議した。これに対し板垣氏は「カネ（報酬）はもらっていないのか」と何度も尋ね、金さんが「ない」と答えると「信じられない」と述べ、証言の「客観的証拠」を求めた。

日本遺族会顧問でもある板垣氏は先月二十八日の自民党総務会で「(高校教科書が)未成年の女性を強制的に慰安婦として働かせたことを一面的に記述するなど、歴史の真実に基づかなくとも歴史的事実として取り上げている。検定のあり方も含め、もっと真剣に教科書を扱ってほしい」などと語った。

金さんは四日、議員会館に板垣氏を訪ねて約一時間、面談した。一九三七年、日本の植民地下だった朝鮮の大邱市内で、国防服を着た日本人三人に両手をつかまれてトラックで連行され、中国の大連、上海経由で蘇州の慰安所で慰安婦にされたこと、強姦（ごうかん）のショックで消毒液を飲んで自殺を図ったりしたが果たせず、終戦まで八年間、慰安所生活を強いられたことなどを、日本語交じりの韓国語で語った。

金さんと通訳などとして付き添った日本の市民団体の支援者らと板垣氏の主なやりとりは次のとおり。

板垣氏 「当時は貧しさの中で公娼（こうしょう）制度があり、恵まれない女性がいた。（慰安婦問題は）決してほめられたことじゃないし、お気の毒だと思うが、官憲が首に縄をつけて連れていったわけではない」

金さん 「兵隊と一緒に前線を回った。連れて歩いたのはみんな軍人。慰安所から逃げようとしたら兵士に銃撃された。友人は自殺した。一部の日本人が強制がなかったとか妄言を吐くので、胸の中がかきまわされる思いだ。私が発言しないとわからないのか、と名乗り出た」

板垣氏 「すべて軍がねえ。信じられない。軍も関与したかもしれないが、すべて軍がやったのではなく、そういう役割の業者がいたのではないか」

支援者 「軍直轄の慰安所もあった」

板垣氏 「代償というか、おカネの支払いは？」

金さん 「いっさいない」

板垣氏 「そういう例があったとはまったく信じられない。当時の状態からそう判断する。政治家としての信念がある。日本人としての誇りもある。強制的に連れていったという客観的証拠はあるのか」

支援者 「金さんの証言を偽りというのか」

板垣氏 「偽りとは言わないがすべて真実かという大きな疑念がある。情緒的にやるべきではない。裏付けが必要だ。私自身判断の根拠はないと言っているのだ。原爆手帳を渡すにせよ、残酷なようだが、資料を整えて初めて客観的になる。悲惨な運命だったとは思いますが.....」

支援者 「強制があったのは三年前の当時の河野官房長官談話でも認めている」

板垣氏 「私は河野談話を認めていない」

金さん 「あなたは生死をさまよう前線には行っていないだろう。私には体中に傷がある」(あちこちの傷を見せる)

板垣氏 「その八年間に一銭ももらわなかったの」

金さん 「生死の境をのりこえた者に本当か本当じゃないという話をどうしてするのか。かつて戦場で私の体を汚し、五十年たって今度は私の魂まで汚すのか。断じてない」

○「慰安婦は商行為」 「明るい日本」議連結成で奥野元法相

奥野誠亮元法相ら自民党の国会議員が四日、歴史教育の見直しなどを目的とした「明るい日本」国会議員連盟を結成した。同党の衆参両院議員百十六人が名を連ねており、会長に就任した奥野氏は記者会見で、**従軍慰安婦問題**について「慰安婦は商行為に参加した人たちで、強制はなかった」と述べ、高校や中学校の教科書の記述を批判した。

党本部で開いた結成総会には、国会議員四十六人と議員の代理の秘書ら四十六人が出席。趣意書によると、「侵略国家として罪悪視する自虐的な歴史認識や、卑屈な謝罪外交には同調できない。戦後見失った大切なものを取り戻し、健全な日本人の育成をめざす」としている。当面は議連に歴史と教育問題の検討小委員会を設け、提言をまとめる。

総会後の会見で奥野氏は「従軍記者や従軍看護婦はいたが、『従軍』慰安婦はいな

い。商行為に参加した人たちだ。戦地で交通の便を（国や軍が）図っただろうが、強制連行はなかった」と発言。同席した事務局長の板垣正参院議員も「性的虐待のイメージを植え込む教科書のあり方はおかしい」と語った。

奥野氏らは昨年、「終戦五十周年国会議員連盟」をつくり、戦後五十年の国会決議に反対した。「明るい日本」議連は五十周年議連を引き継いだ形だ。

●過ち認めるのは正当

作家、落合恵子さんの話 二人の政治家にお聞きしたい。沖縄のあの少女があなたの娘だったら、あなたは怒らないか。「慰安婦」問題もまったく地続きのものであり、彼女たちは時代と歴史と力学の犠牲者である。犯した過ちを認めるのは自虐的な歴史認識ではなく、人間として正当な認識だ。二人の発言は彼女たちに対するセカンドレイプ（第二の強姦）以外のなにものでもない。

【写真説明】

「未成年を慰安婦として働かせたとするのは歴史の真実ではない」などとの板垣正参院議員の発言に抗議し、同議員に訴える金相喜さん＝4日午後、東京・永田町の参院議員会館で¹³

¹³ Anon. (5.6.1996) 板垣発言に韓国の元慰安婦が抗議 板垣議員、「証拠を」と反論. in *Asahi shinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 11.7.2014)

Príloha 14: Výrok osackého starostu Hašimota Tórua o systéme útechy z 13.5.2013

慰安婦問題を巡る橋下氏の発言（要旨）

日本維新の会の橋下徹共同代表の13日午前の発言要旨は次のとおり。

侵略の定義について学術上、きちんと定義がないことは安倍首相が言われているとおりだが、日本は敗戦国。敗戦の結果として侵略だということはしっかりと受け止めないといけない。実際に多大な苦痛と損害を周辺諸国に与えたことも間違いない。反省とおわびはしなければいけない。

ただ、事実と違うことで日本国が不当に侮辱を受けていることにはしっかりと主張しなければいけない。

なぜ日本の慰安婦問題だけが世界的に取り上げられるのか。日本は「レイプ国家」だと、国をあげて強制的に慰安婦を拉致し、職業に就かせたと世界は非難している。その点についてはやっぱり、違うところは違うと言わないといけない。

意に反して慰安婦になってしまった方は、戦争の悲劇の結果でもある。戦争の責任は日本国にもある。心情をしっかりと理解して、優しく配慮していくことが必要だ。

当時は日本だけでなくいろんな軍で慰安婦制度を活用していた。あれだけ銃弾が雨嵐のごとく飛び交う中で命をかけて走っていくときに、そんな猛者集団というか、精神的にも高ぶっている集団は、どこかで休息をさせてあげようと思ったら慰安婦制度は必要なのはこれは誰だってわかる。

ただ、日本国が、韓国とかいろんなところの宣伝の効果があって、レイプ国家だと見られてしまっている。ここが一番問題。証拠が出てくれば認めなきゃいけないが、今のところ2007年の（第1次安倍内閣の）閣議決定ではそういう証拠がないとなっている。そこはしっかり言っていかなきゃいけない。¹⁴

¹⁴ Anon. (14.5.2013) 維新・橋下氏の発言に物議 「慰安婦制度、必要だった」 市民団体「感覚が恐ろしい」. in *Asahi šinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 11.7.2014)

Príloha 15: Príspevok Tanaku Nobujukiho z dňa 15.8.2013

(語りつぐ父の戦争：2) 田中信幸さん 「日本兵の罪」見せた覚悟 / 熊本県

「父が戦場でなぜ慰安所に行ったのか。答えはなかなか見つからなかった」

13日、韓国挺身(ていしん)隊問題対策協議会の招きでソウルを訪れた田中信幸さん(62)＝熊本市中央区＝は、慰安婦問題のシンポジウムで、7年前に91歳で亡くなった父の話をした。

身内が「慰安所を利用した」と告白するのは気持ちのいいものではない。だが若い世代に父の思いを伝えるのが自分の役割だと思い、腹をきめた。

田中さんが電気工事業を営む傍ら、歴史教科書や従軍慰安婦などの問題に取り組むようになり、かれこれ長い。きっかけは父から聞いた戦争体験だ。

幼い頃、父から戦争の話を聞くのが大好きだった。

「フィリピンで食べたバナナやパイアは甘くてうまかったねえ」。軍艦や戦闘機の絵をノートに描き、好んで軍歌を歌った。活躍したと自慢げに話す父をカッコいいと思っていた。

戦争に疑問を抱くようになったのは高校3年の時。元兵士の証言や戦時下の中国の様子などを本で読み、人間がごみのように扱われ、死んでいく現実を知った。「あれは日本の侵略戦争だったのではないか」

大学では学生運動にのめり込んだ。東京で沖縄返還協定に反対するデモに参加し、逮捕された。勾留中、思い切って手紙で父に疑問をぶつけた。

「私は真実が知りたい」

保釈されて熊本に戻り、父に会うたびに戦争の話を持ちかけた。「南京では虐殺に加わったのか」「慰安所にも行ったのだろう」。本で知った「日本兵の罪」をぶつけては責め立てた。

「もうやめてくれ……」

父は心を閉ざすようになった。

こんな言い方じゃいけないと、父の体験を受け入れるように、時間をかけて、徐々に聞くようにした。

ある日、意外な話が出てきた。かつて戦争を肯定的に話していた父は、てっきり保守的な思想だと思っていたが、若い時はプロレタリア文学に傾倒し、政治改革を訴えるビラを配り、危険思想と疑われて憲兵に尋問を受けていた。時代は違うが考え方は自分と同じ方向だったんだと思った。

対話を10年以上続けただろうか。父は突然、日記と手紙をよこした。日記はポケットに入るような小さなノートに2冊、手紙は300通以上。家族の誰一人、その存在を知らなかった。

日記は中国戦線で従軍中に書きためたもので、手紙は別の戦地にいる戦友や、日本の親族らから安否をたずねるものだった。

驚いたのは日記の内容だ。

《昭和13年2月21日 今日は楽しい外出日だ。先（ま）ず朝鮮征伐に行く。
最後に、恋人八重ちゃんそっくりの懐かしい竹の七号智恵子さんを尋ねた
3月13日 三人して慰安所に行った。日本・支那・朝鮮を征伐して帰る》

「征伐」とは慰安婦を利用すること、国名は慰安婦の出身地、「智恵子さん」は慰安婦の名前だという。父が説明してくれた。

初めて人を斬り殺し、ほぼ毎日書いていた日記が1週間途絶えるほど動揺したとも。「戦争なんて二度とするもんじゃない」

父は、田中さんが元慰安婦へのカンパを募ったり、裁判を支援したりしていたことも知っているはずだった。本来なら、墓場まで持っていこうとしていた話かもしれない。それでも話してくれたのは、本当の戦争の姿を伝えようとした父の覚悟と感じた。

それ以来、時間を見つけては日記の内容を父と2人でひもといた。その作業は父が亡くなるまで続いた。

「戦場で何があったかを残そうとした日記は、父が自分に託したバトンなんです」
自分が次へとつなげるために、最後まで読み解くつもりだ。¹⁵

¹⁵ Tanaka, Nobujuki (15.8.2013) (語りつぐ父の戦争：2) 田中信幸さん 「日本兵の罪」
見せた覚悟 / 熊本県 . . . in *Asahi šinbun* [online], dostupné z
<http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 11.7.2014)

Príloha 16: Záznam z tlačovej konferencie s novým generálnym riaditeľom NHK, Momiiim Kacutom z dňa 25.1.2014

梶井NHK新会長会見 主なやり取り

NHKの梶井勝人新会長の25日の記者会見での主なやり取りは次の通り。▼1面参照

私の任務はボルトやナットを締め直すこと。放送法を順守しながらいろいろな課題に取り組んでいく。

—尖閣諸島などの領土問題について、国内番組で日本の立場を伝えたほうが良いという考えか。

日本の明確な領土ですから、これを国民にきちっと理解してもらう必要がある。今までの放送で十分かどうかは検証したい。

—国際放送では日本の立場を政府見解そのままに伝えるつもりか。国際放送は国内とは違う。領土問題については、明確に日本の立場を主張するのは当然のこと。政府が右と言うことを左と言うわけにはいかない。

—靖国神社の参拝と合祀（ごうし）についての考えは。総理が信念で行かれたということで、それはそれでよろしい。いいの悪いのという立場にない。

—NHKの報道姿勢としてはどうか。

ただ、淡々と総理は靖国に参拝しましたのでピリオドだろう。

—正月の番組で印象に残ったものは。

どの局も一緒。NHKをできるだけ見た。他社の番組も見た。それほど、これがよかったというのは用意していない。

—慰安婦を巡る問題については。

戦時中だからいいとか悪いとかいうつもりは毛頭無いが、この問題はどこの国にもあったこと。

—戦争していた国すべてにいたということか。

韓国だけにあったと思っているのか。戦争地域にはどこでもあったと思っている。ドイツやフランスにはなかったと言えるのか。ヨーロッパはどこでもあった。なぜオランダには今も飾り窓があるのか。

慰安婦そのものは、今のモラルでは悪い。だが、従軍慰安婦はそのときの現実としてあったこと。会長の職はさておき、韓国は日本だけが強制連行をしたみたいなこと

を言うからややこしい。お金をよこせ、補償しろと言っているわけだが、日韓条約ですべて解決していることをなぜ蒸し返すのか。おかしい。

—会長の職はさておきというが、公式の会見だ。

では全部取り消します。

—取り消せない。

会長としては答えられないが、それだとノーコメントばかりになるから「さておき」と言って答えた。

—秘密法については。

世間が心配していることが政府の目的であれば大変だが、そういうことはないだろう。秘密法は政府が必要と説明しているので、様子を見るしかない。

—強い反発があった問題だが。

色々な意見があっている。政府の中にはメディアは反対ばかりで、賛成があってもいいという意見もある。

—番組に対して、自身の考えを反映させたいという思いがあるか。

ない。私がどういう考えであろうがなかろうが、放送法に基づいて判断していく。

—政権の意向を代弁したいと考えるか。

ない。放送法と何度も言っているのは、それがあるから距離を保てるということ。私の発言は、政府からふきこまれたわけでも何でもなし。¹⁶

¹⁶ Anon. (26.1.2014) 靱井 N H K 新会長会見 主なやり取り. in *Asahi šinbun* [online], dostupné z <http://database.asahi.com/library2e/main/start.php>. (Citované 11.7.2014)